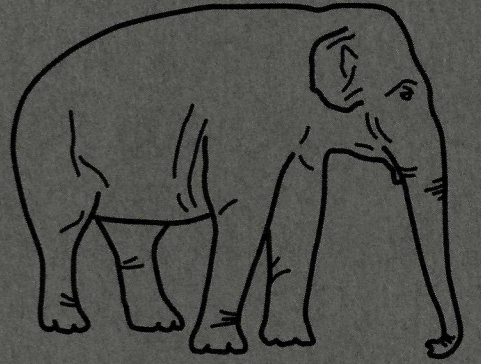


生きもの
博物誌
【アジアゾウ】



武器になった生き物

山中 由里子
(やまなか ゆりこ)

本館民族文化研究部

傷を負ったゾウは暴れ狂い、敵も味方も見境なく蹴散らし始めたために戦列は乱れ、結局インド軍は退陣する。

伝説と化す

わたしが研究するアレクサンドロスにまつわる伝説のなかで、この戦象の場面はハイライトのひとつである。アレクサンドリアで紀元後三世紀までに成立したとされるギリシア語の「アレクサンドロス物語」では、アレクサンドロスが持ち合わせていた銅像を熱してゾウの前に投げ出し、それを鼻でつかんだゾウが大火傷をして退散したという話になっている。

また、「アレクサンドロス物語」の影響を受けたであろう九世紀のアラブの歴史家ヤアクービーは次のように書いている。

アレクサンドロスは不意を討って国に攻め込んだが、ポロスは反撃した。ポロスは戦象を投入したのである。その大きさはアレクサンドロスをはるかに上回るものであり、対抗の仕様がなないように見えた。しかしアレクサンドロスは銅像を作らせた。なかはナフサと硫黄で満たし、火を入れ、速力を高め、外側には武器を施した。軍の先頭を走らせ、敵軍が近づくと、ゾウに向かってけしかけた。ゾウは鼻で襲い掛かり、銅像に巻きつけた。ところが鼻は焼け焦げ、ついにゾウどもは逃げ出した。

焼き豚特攻隊で対抗

ローマの著述家アエリアノス(二七五年前後)の『五年ごろの『動物の本性について』にも気になる記述がある。アレクサンドロスの後継者の一人アンティオ

塞であつたわけである。一方、機敏な動きができず、パニック状態になると制御できなくなるという難点もあつたらしい。

戦象が登場する歴史上の有名な合戦といえば、ヒュダスベス河畔(現ジェルム川、バキスタン)におけるアレクサンドロス大王とインド王ポロスの戦い(紀元前三二六年)がまず挙げられる。インド側には二〇頭ほどのゾウがいたとされ、アレクサンドロスの苦戦ぶりはアツリアノスやクルティウスなどの歴史家が詳細に記している。ポロス軍の戦列正面に配された戦象集団に、さすがのアレクサンドロスも初めはたじろぐが、敵の左翼と背後からまわり込み、飛び道具で象使いを狙い、斧や鎌でゾウの足や鼻を攻めた。激戦の末に御者を失い、

戦象という武器

人間に調教され、見世物になったり、重機になったり、乗り物になったゾウは、賢く従順に見えるが、いったん暴れると凶器と化す猛猛な動物なのである。人間はゾウのこの破壊力をも利用しようとしてきた。

戦車ならぬ「戦象」は、インド、東南アジア、古代地中海世界において、敵を威圧し戦列を破砕するための、強力な生体兵器として用いられた。騎兵や歩兵よりもずっと高い位置から、しかも移動をしながら矢を放つことができる。さらに皮膚が比較的分厚いため、ウマなどに比べ矢や槍に強かった。まさに動く要

ノスはメガラ人と戦った際に、戦象を動揺させるために、ブタに液状のタールピッチを塗り、火をつけ放した。火達磨となってキーキーと鳴きながら走り回るブタにゾウが怯えたという。

こうした古代、中世の戦象のエピソードを読むと、なぜか「スターウォーズ」帝国の逆襲で帝国軍の「AT-AT」(全地形装甲トランスポート)を反乱同盟軍の勇士たちが撃退する場面を思い起こすのである。映画製作

者の舞台裏話によると、あの四足歩行の巨大な装甲車はゾウの動きをもとにしたストップモーション・アニメーションだというから、あれもやはり武器と化したゾウなのである。



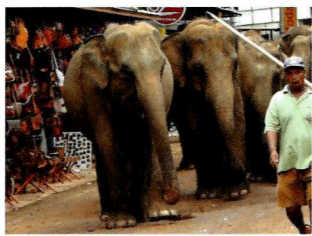
戦うゾウの名残。
インドのチェス(H92921)



スリランカ中央高地の働くゾウ(提供:杉本良男)



スリランカの町中をおとなしく歩くゾウ(提供:池谷和信)



(提供:池谷和信)

アジアゾウ(学名: *Elephas maximus*)

哺乳(ほにゅう)綱長鼻目ゾウ科。インド、スリランカ、ミャンマー、スマトラ島、ボルネオ島北部に分布。体長は500~640cm、尾の長さは100~150cm、体の高さは200~300cm。体重はオスは平均4~5トンで、メスは2~3トン。胴体は中央部でもっとも高くなる。アフリカゾウに比べるとやや小型。人間によるゾウの飼育と利用の歴史はかなり古いとされる。モヘンジョ・ダロからは、すでに紀元前2500~前1500年にアジアゾウを家畜として使用していたことを示唆する出土品が見つかっている。